

ダイバーのミカタ

第3回

今回ご紹介するのは、
このお二人です

川島整形外科病院
川島真人先生
旭川医科大学病院
郷一知先生

全国のDD Netドクターや潜水医学に詳しいお医者さまをリレー形式でご紹介する企画。得意分野や日々どのようにダイバーの治療や健康相談にあたっているか、さらにはヒューマンな素顔まで、つぶさにご紹介します。今回は日本の北と南で、地元の職業ダイバーたちを治療の面からサポートし続けてきたオーソリティの登場です。

漁業者の骨壊死に 取り組んで37年

川島整形外科病院／川島真人先生



Mahito Kawashima

1944年大分県生まれ。東京医科歯科大学医学部卒。医学博士。虎の門病院整形外科、九州労災病院整形外科勤務を経て、1981年に故郷の中津市に川島整形外科病院を開業するかたわら、東京医科歯科大学医学部臨床教授なども務める。日本整形外科学会専門医・リウマチ医・スポーツ医、リハビリテーション学会臨床認定医、日本医師会認定産業医・スポーツ医、日本リウマチ財団登録医。日本高気圧環境・潜水医学会副代表理事。

世界各地で潜水医学の 講演も数多くこなす

川島先生は40年近くにわたり世界レベルで「骨壊死」の治療・研究を牽引してきた第一人者。減圧症治療例はすでに800症例を超え、1975年に減圧性骨壊死の労災認定を日本で初めて行ったのも川島先生です。日本はもとより海外各地でたびたび講演やシンポジウムを行うなど、その活動内容や著書、論文、肩書きを列記していくだけで何ページも必要になってしまうくらいの、潜水医学界のまさに重鎮です。

「九州労災病院に勤務していた1972年に、今は亡き天児民和名誉教授に薦められたのがきっかけで潜水漁業者の骨壊死について研究を始めました。以来、漁師ダイバーの減圧症治療や骨壊死検診、整形外科の治療を手がけるかたわら、潜水士に対する啓発活動や日本高気圧環境・潜水医学会ならびにアメリカのUndersea & Hyperbaric Medical Societyなどで減圧症の研究活動をつづけています」

93の病床を有し、年間の入院患者が約2000人を数える川島整形外科病院は大分県では唯一、第2種高気圧治療装置を3基備え、24時間体制で減圧症の救急治療を行っている頼もしい医療施設です。加えて先生は年間20～30例の骨壊死検診も行っているとのこと。「日本高気圧環境・潜水医学会によると、減圧症に対する再圧治療では第1種高気圧治療装置(1人用)はあくまで緊急非難の処置用であって、できる限り患者は医師や医療従事者が一緒に入れる第2種装置(多人数用)のある施設へ搬送されるべきとしています。ところが'09年9月現在、第2種装置は全国でも51基、九州では当院以外では八木病院、聖マリア病院、九州労災病院、自衛隊佐世保病院、鹿児島大学病院などに計13基あるだけです」

患者の9割は漁師、 その8割はベンズ罹患

そのためもあってか、ダイバー患者の約9割を占める漁業ダイバーは県内や佐賀、鹿児島など九州各地からはもとより、沖縄、四国、中国地方と広範囲なエリアから訪れてくるそうです。減圧症の治療が約8割ベンズだということも、大きな特色でしょう。

「かつて鹿児島から四肢麻痺の状態で来られたダイバーを治療したところ、下半身麻痺は残ってしまいましたが、それでも車を運転できるまでに回復した例が印象に残っています。

ダイバーの皆さんに申し上げたいのは、レジャーダイバーはむろんのこと、職業ダイバーであっても自分の技術を過信することなく、基本と規則を忠実に守り、リスク管理に配慮したダイビングをしていただきたいと思いますし、万一減圧症が発生した場合にはふかしなどの自己治療はせず、できるかぎり早く連絡を取って来院し、治療を受けていただきたいということです」

'08年には杉田玄白賞、2008年度日本臨床整形外科学会学術賞を、'09年には大分県知事賞、大分県医師会功労賞を受賞するなど、今やすっかり地元の名士ともなっている川島先生。'08年には地元中津市で『第3回日米宇宙・潜水・高気圧環境医学合同学会』を開催したのも記憶に新しいところ。

ご自身は「沖縄でダイビングのコースを受講したことがある」程度で、骨壊死の研究はあくまでも医学者としての興味に端を発するもののようですが、先生が潜水医学の発展に貢献してきた功績の大きさは計りしれません。



第3回日米宇宙・潜水・高気圧環境医学合同学会で講演する川島先生